

青少年の職業価値の計量社会学的分析¹

— KYPS (Korea Youth Panel Survey) データを用いた分析 —

姜 永 培*

The Analysis on the Occupational Value of High School Students in Korea
— The Analysis of KYPS Data —

Kang, Youngbae

要 約

本稿は、韓国青少年パネル調査 (KYPS, Korea Youth Panel Survey) のデータを用いて高校生の職業価値を計量的な手法を使って分析した。分析データは、2005年の3年次データ (90.6%) であり、そして職業価値尺度は外的価値、内的価値、環境的価値、自律・創造的価値、社会的価値の5つのカテゴリで構成されている。分析結果、韓国の高校1年生は自分の将来就きたいと思う職業に対して、内的価値、社会的価値、環境的価値、自律・創造的価値、外的価値の順で価値を付与している。彼らは職業の内的、社会的価値を重視する傾向が強い。といっても職業の自律・創造的価値、外的価値を無視しない態度を示した。次に性別には、男子生徒と女子生徒の間に職業価値に対する統計的な有意は見つからなかった。そして学校類型別には一般高校の生徒が実業高校の生徒に比べて職業の内的価値、社会的価値、環境的価値、外的価値を重視する傾向が強いことが明らかになった。第3に職業価値の影響要因については、性別、学校類型別、学業達成度、性役割態度のような個人的変数の影響が強く、親の職業、学歴、所得などのような環境的な変数の影響は相対的に弱いことがわかった。

キーワード 青少年、キャリア設計 職業価値 KYPS

1. はじめに

進路発達段階 (career developmental stage) から見ると、幼稚園・小学校の段階は進路を認識 (career awareness) する段階、中学校と高校時期は進路を探索・選択・準備 (career exploration and preparation) する段階、大学時期は進路をより専門化 (career specialization) する時期として分類することができる (李他 2000)。中学校・高校時期に進路を探索し、選択と準備するということは生徒たちが直接あるいは間接的な体験を通じて職業世界に触れることを意味する。更にこの時期は上述した経験に基づいて職業と自分の価値観、適性そして興味等との適合性を検討し、自分の将来を左右するに当たって求められる意思決定能力を修得したうえ、自分の進路選択の幅を徐々に絞っていく。また暫定的であるものの自分の進路を選択し具体的な準備に突入するプロセスに該当する (李他 2004)。このようなプロセスには自分の職業的適性、興味、能力などを見つける自己探索過程、職業の大切さ、職業の種類そして自分

* 総合人間学部 現代社会学科

¹ 本稿は、2006年度に発行した『青少年の嗜好職業及び職業価値特性に関する研究』(韓国青少年開発院)の内容一部に修正・加筆したものである。

の職業展望などを模索する職業世界の探索過程、このような職業を実体験として体得する職業現場の探索過程が含まれている。

従って、生徒たちは自分の生涯発達を成し遂げるために中学校と高校時期に職業・進路教育に関する様々なプログラムを通じて多様な職業世界を調べながら自分の職業的適性と興味、能力を把握し、暫定的な進路を設定し自分の進路を開拓していく努力が必要である。更に政策当局、学校、父母などは生徒たちが自分の進路探索・準備・選択ができるように様々な機会と進路教育の機会が提供できる制度的な取り組みをしなければならない。そうすることによって生徒たちが大きな試行錯誤を経験せずに無難に社会進出を図ることができるからである。

ところが、青少年期の進路指導は各個人がどのような職業を希望しているのか、また各個人が希望する職業を通じて追求する価値が如何なるものなのかを考慮しながら行われる必要がある。何故ならば何より職業価値に対する探索し、明確して合理的な進路決定に先行するため、また個人が職業を通して追及する価値と個人が選択した職業的特性が一致しない場合には職業不適応もしくは低い職業満足を引き起こすことになり、このような状況は個人的、社会的損失に繋がるからである。

最後に、本稿では韓国青少年パネル調査 (KYPS) に含まれている高校1年生を対象にし、彼らの職業に対する価値観を調べることにその目的がある。特に高校時期は、教育段階において1次分化 (tracking) を終了する時期であり、卒業後社会進出と大学進学という2つの大事な選択が行われる。その点からすれば、彼らの職業価値特性は示唆することが多いと考える。

2. 職業価値の概念と関連要因

2.1 職業価値の概念

まず、Kluckhohn (1962) は、価値 (Value) とは行動の目標、利用可能な手段様式の選択に影響を与える個人または集団が独自に有している願望対象に対する外在的あるいは内在的な概念と定義している。李 (2000) は個人の仕事に対する価値観は人々が仕事を通じて獲得できる経験の重要性を判断するメールマルクであると述べている。その一方、南 (1995) は価値を個人的、社会的に期待の高い安定した上位概念としてある行動に対する基準としての機能、葛藤解決と意思決定のための企画機能、そして行動を長期的に案内する動機を提供する機能として働くと考えている。言い換えれば、個人の職業選択において価値が重要な基準として働き、更に将来を設計、計画する機能そして動機を付与する機能として働くことを主張する。一方、梁と鄭 (1998) は、職業価値観を個人がある職業または職業的活動に対してどのような考えと態度を堅持しているのか、そしてこのような活動に対して如何なる価値を付与しているのかを包括する概念と定義している。

だとすれば、このような職業価値はいかにして測定されているのか。昨今まで職業価値の測定のために様々な試みが行われてきたが、最も幅広く用いられている尺度として Super (1973) の「WVI, Work Value Inventory」があり、彼の開発した尺度は15項目で構成されている。一方、Miller (1973) は仕事に対する価値観を外的領域と内的領域に分類しており、外的領域には協同性、経済的報酬、独立性、名誉、安定性、上司²との関係、勤務条件、多様性、生活

² 元々は Supervisor、つまり監督、管理者となっているが、韓国の職場の状況などを考慮した上、「上司」と訳したほうが現実的であると判断した。

方式などの要素が含まれている。そして内的領域には達成度、利他主義、創意性、審美性、知的刺激、経営管理などの要素が含まれている。

表1 職業価値の下位領域

下位領域		内容
外在的価値	権力追求	職業選択の際に身分、名声または名誉を重視する傾向
	経済優先	富、収入、経済的自立などを中心に仕事と職業を選択しようとする傾向
	個人主義	健康と老後対策などを考慮に入れながら仕事または職業を選択しようとする傾向
	社会認識重視	社会身分の尺度として周りの評価を考慮する傾向
	安定性追求	家庭の平和または一身上の安定を追及する傾向
内在的価値	自己能力	自分の興味、適性、性格を中心に仕事を職業を選択しようとする傾向
	社会献身	仕事または職業を社会的奉仕活動の観点からやり甲斐を求める傾向
	人間関係中心主義	人間関係を重視し、社会構成員の任務を優先的に考慮する傾向
	理想主義	自分の理想を実現してくれる道具として職業を選択しようとする傾向
	自己表現	仕事と人生を通じて自分を表出しようとする傾向

出展：金他（1998）『韓国人の職業意識調査』p 27.

その一方、最近職業価値に関する研究が活発に行われているなか、従来の外在的価値と内在的価値と二元化されていた職業価値をより細分化しようとする試みが見られているが、金（2006）は韓国青少年パネル調査（KYPS）2次年度データに基づいて中学校3年生に対して分析した職業価値に関する研究では職業価値を「外的価値」、「内的価値」、「環境的価値」、「自律・創造的価値」、「社会的価値」の5つの範疇に分けて分析している。まず、彼は外的価値の領域には、「金儲けができる」、「権力の高さ」、「社会的名誉の高さ」という3つの項目を設定しており、内的価値には「学習意欲」、「発展可能性」、そして「素質、適性」に関する項目を設定している。次に、環境的価値には「時間的な余裕」、「快適な勤務環境」、「雇用の安定性」を、自律・創造的価値には「自由裁量権の多さ」、「単純反復の作業ではなく様々な業務が経験できる仕事」、「アイデアを出し合って新たな試みのできるチャンスが多い」などの項目が含まれている。最後に、社会的価値の領域には「社会のために奉仕できる」、「一人ではなく人と共に協力しながら仕事ができる」という項目が含まれている。

本研究では、上記の金の先行研究を参考にしながら、高校生の職業価値を外的価値、内在的価値、環境的価値、自律・創造的価値そして社会的価値の5つの範疇に分けて分析を行う。

2.2 職業価値の関連要因

公報処（1996）は韓国青少年の職業意識の特徴として彼らは極めて現実的で、伝統的な意識を有している大人世代とは異なって一般的に職業の内在的そして理想的な価値を重視する傾向が強いと報告している。また金他（1999）の調査では青少年たちは自分の職業選択において職業そのものが与えてくれるやりがいとそれを通じる社会的成功のために職業に就きたいと思っていることがわかった。即ち青少年たちは職業価値において1次的には職業の内在的価値を重視するが、だといっても社会経済的な地位のような外在的価値を否定してはいないことがいえ

る。更に彼らは職業を楽しみながらまた職業生活を通じて満足も追求すると共に、そのような職業活動を通じて経済的にも安定的な生活を維持しようとする傾向を持っていると見られる。李（1993）は、韓国の若い世代は将来自分の職業決定の際職業の内在的価値よりは職業的地位、収入などのような外在的価値を一層重視しており、更に学年が進行するにつれてこのような傾向は益々強くなると主張する。

一方、一般的に中学生程度の年齢層は職業価値において現実的よりは比較的理想的（ideal）な傾向が強く、従って職業を通じた自我実現とかあるいは社会貢献などに高い価値を置いていることも知られているが、梁（1998）の研究結果、中学生たちは職業を通じる自我実現または社会貢献よりは外部からの干渉されることなく自分が選択した職業に安心して従事できることと、職業を通じて人との付き合いができることに高い価値を置いていることがわかった。

そして、金（2006）は中学生たちの職業価値において家族背景よりは性別、学業達成度、生徒の教育的アスピレーション、性役割態度に有意な影響が存在するとみている。ところが、この研究では青少年の職業価値を分析する際に動的な変数または経験変数を視野に入れておらず、静的な変数（帰属変数）のみを用いているため、青少年を職業価値観形成において消極的な態度を堅持している存在として見なしていることがいえる。

上述した結果と関連して、Schulenberg（1993）は人間の職業的価値は静的（static）ではなく、成長過程において様々な要因の影響を通じて変化すると主張する。Blustein（1989）は、青少年たちは成長するにつれて職業に対する満足、自我実現のような内在的価値の比重が増加する反面、経済的価値、社会的地位のような職業の外在的価値の比重は減少すると述べている。以上の論議を通して考えられることは、このような研究結果も青少年の職業価値は流動的でなお可変的な特性を持っているため、中学生時期以降に彼らが経験する環境の変化と経験の質的、量的蓄積を通じて変化していく可能性が高いといえる。

青少年の職業価値を性別に分けてみると、姜（2004a）の研究によると、韓国の男性青少年は職業のもたらす経済的な報酬を重視する傾向が強いのに対して、女子青少年は職業を通じる様々な人々との交流と経験を重視する傾向が強かった。そして女子中学生は職業の収益性、尊敬性、環境性、安定性を重視する傾向が強いが、男性青少年は社会奉仕、学習志向性、業務の自律性と創造性、リーダーシップと協同意識を重視する傾向が強かった。梁と鄭（1997）の研究では男子青少年は職業価値のうちリーダーシップと収益性などのような価値を重視する一方、女子青少年は対人関係を重視していることが明らかになっている。李（1997）の調べでは、男子大学生は職業の利他性、創造性を、女子大学生は勤務条件を職業選択の優先順位として考えていることがわかった。一方、Krau（1987）の研究によると、女子青少年は男性青少年に比べて職業の外在的な価値を重視する傾向にあると報告している。最後に、Fiorentine（1988）の研究では職業価値において男女間に有意な差異が見つからなかった。

以上のように青少年の性別による職業価値の違いについて調べてみた。次に親の影響について見てみよう。金他（1998）の研究では親の学歴が青少年の職業価値に影響を与えていることが明らかになっており、とりわけ父親の学歴が高いほど青少年は職業の社会経済的な価値を重視する傾向が強かった。ところが母親の学歴は青少年の職業価値にあまり影響を与えていなかった。これと関連して姜（2004b）の研究では父親だけではなく母親の学歴が高いほど青少年の職業を通じる自我実現の欲求は強かった。

最後に、張（2000）はアルバイト経験が青少年の職業価値に有意な作用をすると見ている。

彼は青少年のアルバイト経験は彼らの経済に対する認識を高める効果があり、このような効果は彼らのアルバイトの目的に関連していると見ている。つまり、アルバイトに参加する多くの青少年たちは社会生活の経験を積むより経済的な収入を得るためにアルバイトに参加しているので彼の主張は一定の説得力を持つといえる。しかし、彼の研究にはアルバイトの具体的な内容がなく、実際アルバイトに参加している多くの青少年は配達、接待、単純事務補助などにつけられているため彼らの経験の効果については一層綿密な検討が求められる。この他にも青少年の職業価値には社会化 (socialization)、自己効力意識 (self efficacy)、性役割意識 (sexrole identity) のような要因も検討されるべきであると考えられる。

3. 研究方法

3.1 分析資料

本稿の分析に用いたデータは韓国青少年政策開発院の multi point prospective panel survey design の下で、2003年の基準標本から選定された中学校2年生と父母を対象に今後6年間同一標本を反復追跡調査の方法で実施している韓国青少年パネル調査 (KYPS, Korea Youth Panel Survey) の1-3年次データのうち、3年次年度高校1年生のデータである。

2年次のデータは1次年度の調査結果の最終標本から構築した3,449名の青少年と親を対象に2004年11月15日～12月31日まで追跡調査したデータである。調査結果、青少年を基準にして1次年度の調査対象者3,449名の92.4%にあたる3,188名のデータを収集することができた。3年次のデータは1次年度の調査結果の最終標本から構築された3,449名の青少年と親を対象にして2005年10月20日～12月20日まで追跡したデータである。調査結果、青少年を基準にして1次年度の調査対象者3,449名の90.6%にあたる3,124名のデータを収集することができた。

表2 中学2年生のパネル2次年度調査の標本維持率

	調査対象 パネル数 (人) A	調査可能 パネル数 (人) B	調査成功 事例数 (人) C	調査対象パネル 対比調査成功事例 数 (%) A/C	調査可能パネル数 対比調査成功事例数 (%) B/C
ソウル特別市	587	573	528	89.9	92.1
仁川広域市	199	196	185	93.0	94.4
京機道	773	765	675	87.3	88.2
江原道	123	123	103	83.7	83.7
大田広域市	102	102	99	97.1	97.1
忠清道	255	254	245	96.1	96.5
光州広域市	137	136	132	96.4	97.1
全羅道	249	247	231	92.8	93.5
釜山広域市	255	253	246	96.5	97.2
蔚山広域市	106	106	105	99.1	99.1
大丘広域市	212	212	201	94.8	94.8
慶尚道	451	450	438	97.1	97.3
合計	3,449	3,417	3,188	92.4	93.3

表3 中学2年生のパネル3次年度調査の標本維持率

	調査対象 パネル数 (人) A	調査可能 パネル数 (人) B	調査成功 事例数 (人) C	調査対象パネル 対比調査成功事例 数 (%) A/C	調査可能パネル数対 比調査成功事例数 (%) B/C
ソウル特別市	600	584	520	86.7	89.0
仁川広域市	198	191	175	88.4	91.6
京機道	775	761	685	88.4	90.0
江原道	121	119	107	88.4	89.9
大田広域市	102	101	97	95.1	96.0
忠清道	249	247	237	95.2	96.0
光州広域市	138	137	124	89.9	90.5
全羅道	241	238	221	91.7	92.9
釜山広域市	254	250	234	92.1	93.6
蔚山広域市	108	107	105	97.2	98.1
大丘広域市	215	214	190	88.4	88.8
慶尚道	446	442	429	96.2	97.1
済州道	2	2	1	50.0	50.0
合計	3,449	3,393	3,125	90.6	92.1

3.2 重要変数の測定

職業価値のうち外的価値の測定は、1) お金を多く稼ぎたい、2) 権力がある、3) 社会的名誉(威信)が高いの3つの質問を提示し、各々の質問に対して「まったくそうではない」、「そうではない」、「どちらともいえない」、「そうだ」、「非常にそうだ」の5点尺度で測定した。内的価値の測定は、1) もっと勉強し、成長できる、2) 自分の素質と適性に合うという2つの質問を提示し、外的価値と同様に5点尺度で測定した。環境的価値の測定は、1) 時間的な余裕がある、2) 快適な環境で仕事ができる、3) 長く安定的に仕事ができるという3つの質問を提示し、各々の質問に対して5点尺度で測定した。自律・創造的価値の測定は、1) 業務の裁量権、2) 単純反復作業ではなく様々な業務が経験できる、3) アイデアを出し合いながら新たな試みのできるチャンスが多いという3つの質問に対して5点尺度で測定した。社会的価値の測定は、1) 社会に貢献できる、2) 一人ではなく人々と協力しながら仕事ができるという3つの質問に対して5点尺度で測定した。

次に、性別変数は、「男子(1)」、「女子(0)」の2つの尺度で測定し、学業達成度変数は2005年前期の成績を自己記述方式で測定した。性役割態度は伝統的な女性役割態度と伝統的な男性役割態度に分け、伝統的な女性役割態度変数は、1) 女性は社会的に成功するよりは良い男性に出会うことがもっと大切である、2) 女性は自分の意見を主張するよりは人の意見に従うのがきれいにみえる、3) 女性はおとなしく従うのが女性らしいという3つの質問を提示し、各々の質問に対して5点尺度で測定した。そして伝統的な役割変数は、1) 男性には社会的な成功が最も大切である、2) 男性は人の意見よりは自分の意見を主張するべきである、3) 男性はある程度人を統率できる力が求められるという3つの質問を提示し、各々の質問に対して5点尺度で測定した。

4. 分析結果

4.1 職業価値の実態

この節では上述したように高校生の職業価値を5つの範疇（外的価値、内的価値、環境的価値、自律・創造的価値、社会的価値）に分けて分析を行った。外的価値には「大儲けができる」、「権力の行使」、「社会的な高い名誉」などの項目が含まれており、内的価値には「学習と成長可能性」、「素質と適性の合致」の2つの項目が含まれている。環境的価値の概念には「時間的な余裕」、「快適な勤務環境」、「職業の安定性」が含まれており、自律・創造的価値の概念には「自由裁量権」と「単純反復作業ではなく様々な業務が経験できる」、「互いにアイデアを出し合いながら新たな試みができるチャンスがある」という項目が含まれている。また社会的価値の概念には「職業を通じる社会貢献」、「一人ではなく大勢の人々と協力しながら仕事ができる」という項目が含まれている。そして各々の項目は（1）そう思わない、（2）あまりそう思わない、（3）どちらともいえない、（4）ややそう思う、（5）そう思うという5点尺度を用いて分析した。

表4は、高校1年生が自分の将来希望職業に対して与えている職業価値を5つの範疇に分け、その結果を平均値で表している。まず、韓国の高校1年生は自分の将来の職業選択に対して‘素質と適性、学習と成長可能性’を含む内的価値に最も高い点数（平均＝3.90）を与えている。次に‘人と共に仲良い関係を維持しながら社会に貢献できること’を意味する社会的価値に2番目の高い点数（平均＝3.69）を与えている。そして‘時間的な余裕、快適な労働環境及び安定性’を含む環境的価値にも比較的に高い価値（平均＝3.27）を付与していることがわかった。その一方、‘自由裁量権、多様性’などを意味する‘自律・創造的価値’（平均＝3.12）と、‘金、名誉、権力’を意味する外的価値（平均＝3.04）に対しては平均値程度の点数を付与している。即ち、韓国の高校生たちは自分の将来希望職業に対する職業価値を内的価値＞社会的価値＞環境的価値＞自律・創造的価値＞外的価値の順番で与えていることを意味する。

このような結果は2節で述べたように、韓国の若い世代の職業意識は極めて現実的な成人世代とは異なって、職業の内在的、理想的な価値を重視する傾向が強いという公報処（1996）の分析と一致する。更に韓国の若い世代は自分の職業選択において職業そのものが与えてくれるやりがいと職業を通じる社会的成功のため職業を選択するという金他（1999）の研究結果とも一致している。以上の結果をまとめると、韓国の高校生たちは職業の内的、社会的価値を重要視していると同時に自律・創造的、外的価値も否定してはいない価値観を有していることが確認できたといえる。

高校1年生の職業価値特性の分布を性別に分けてみると、男子生徒と女子生徒の間に内的価値、社会的価値、環境的価値、外的価値の範疇において統計的に有意な差は見つからなかった。但し、自律・創造的価値に限っては男子生徒が女子生徒に比べて若干高い価値を付与していることがわかった。

表4 職業価値特性の分布（全体）

変数	外的価値	内的価値	環境的価値	自律・創造的価値	社会的価値
全体平均	3.04	3.90	3.27	3.12	3.69
N	2,316	2,334	2,315	2,219	2,332

表5 性別による職業価値特性の分布

変数	外的価値	内的価値	環境的価値	自律・創造的価値	社会的価値
女子学生	3.07	3.92	3.28	3.07	3.70
男子学生	3.01	3.88	3.25	3.19	3.68
F	2.928	2.359	.822	10.618*	.312
N	2,316	2,334	2,315	2,219	2,322

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

高校1年生の職業価値の特性を系列別に分けてみると、一般高校の生徒たちが内的価値、社会的価値、環境的価値、外的価値など全ての職業価値の側面において実業高校の生徒たちより高い重要性を付与していることがわかった。ところが自律・創造的価値においては統計上の有意は見つからなかった。

表6 性別による職業価値特性の分布

変数	外的価値	内的価値	環境的価値	自律・創造的価値	社会的価値
専門高校	2.93	3.77	3.10	3.16	3.58
一般高校	3.06	3.92	3.32	3.10	3.71
F	10.319***	20.517***	29.423***	1.808	12.815***
N	2,215	2,231	2,214	2,127	2,232

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

以上の分析結果をまとめてみると、韓国の高校1年生は自分の将来従事する職業において内的価値>社会的価値>環境的価値>自律・創造的価値>外的価値の順で価値を付与しており、更に彼らは内的、社会的価値を重視すると同時に自律・創造的価値、外的価値も否定しない価値観を有しているといえる。性別には男子生徒と女子生徒の間に内的価値、社会的価値、環境的価値、外的価値において統計上の有意は確認できなかった。学校類型別には、一般高校の生徒が実業高校の生徒に比べて職業の内的価値、社会的価値、環境的価値、外的価値など全ての職業価値をより重視する傾向にあることがわかった。

4.2 職業価値形成の関連要因

それでは、如何なる要因がこのような職業価値を形成させる関連要因として働いているのか。生徒たちの個人的、家庭環境は生徒たちの職業価値、言い換えれば内的価値、外的価値、環境的価値、自律・創造的価値にどのような影響を与えているのか。まず、先行研究の検討で触れたように青少年の職業価値の影響要因として性別、性役割態度、親の学歴、職業、家庭所得などが考えられるが、ここでは先行研究の結果を踏まえた上高校1年生の性別(男性=1)、学校類型(一般高校=1)、学業達成度、性役割態度、父親の学歴、父親の職業(管理・専門・事務職=1、その他=0)、月平均所得を独立変数と設定し、内的価値、社会的価値、環境的価値、自律・創造的価値、外的価値を従属変数とする回帰モデルを作成して分析した。表7は職業価値の5つの下位概念を従属変数とするOLS回帰分析を行った結果である。

分析結果をみると、職業価値の内的価値において学校類型、学業達成度、性役割態度、父親の学歴変数が影響を与えていることがわかった。つまり一般高校の生徒($\beta = .052^*$)、学業達成度の高い生徒($\beta = -.069^*$)、伝統的な女性役割態度を持っている生徒($\beta = -.162^*$)、

父親の学歴の高い生徒 ($\beta = .074^*$) が職業の内的価値を重視していた。社会的価値においては伝統的な男性役割態度が影響を与えていることがわかった。伝統的な男性役割態度を持っている生徒ほど ($\beta = .094^{**}$) 職業の社会的価値を重視していた。

次に、環境的価値では学校類型、学業達成度変数が影響を与えており、実業高校の生徒よりは一般高校の生徒 ($\beta = .079^{**}$) が、学業達成度の高い生徒 ($\beta = .078^{***}$) が職業価値の環境的価値を重視していた。そして自律・創造的価値では性別、学校類型、学業達成度、伝統的な女性役割態度、月平均家庭所得が影響を与えており、具体的には女子生徒よりは男子生徒 ($\beta = .100^{***}$)、実業高校の生徒 ($\beta = -.065^{***}$)、学業達成度の低い生徒 ($\beta = .053^*$)、伝統的な女性役割態度を持っている生徒 ($\beta = -.080^{**}$)、月平均家庭所得の高い生徒 ($\beta = .042^*$) ほど職業価値の自律・創造的価値を重視する傾向にあった。

最後に、外的価値では学業達成度、伝統的な男性役割態度、父親の職業、月平均家庭所得変数が影響を与えていた。つまり学業達成度の高い生徒 ($\beta = -.104^{***}$)、伝統的な男性役割態度を持っている生徒 ($\beta = .122^{***}$)、父親の職業が管理・専門・事務職の生徒 ($\beta = .073^{**}$)、月平均家庭所得の高い生徒 ($\beta = .063^*$) が職業価値の外的価値を重視していることがわかった。以上の結果を総合してみると、高校1年生の職業価値において性別、学校類型、学業達成度、性別役割態度のような個人的な変数の影響が多く、家庭環境のような変数からの影響はそれほど強くないことがいえる。これは上述した金 (2006) の研究ともほぼ一致する。

表7 職業価値に対する OLS 回帰分析

変数	外的 価値	内的 価値	環境的 価値	自律・創造的 価値	社会的 価値
	Beta	Beta	Beta	Beta	Beta
性別 (男子学生 = 1)	-.035	.028	-.040	.100 ^{***}	.012
学校系列 (一般高校 = 1)	.020	.052 [*]	.079 ^{**}	-.065 [*]	.047
学業達成度	-.104 ^{***}	-.069 ^{**}	-.078 ^{***}	.053 [*]	-.026
性別役割態度					
伝統的な女性役割	-.024	-.162 ^{***}	.014	-.080 ^{**}	-.038
伝統的な男性役割	.122 ^{***}	.040	.030	-.019	.094 ^{***}
父親学歴	-.016	.074 ^{**}	-.010	.037	-.010
父親職業					
サービス・販売・機能職など (0)	-	-	-	-	-
高位職・専門職・事務職 (1)	-.073 ^{**}	-.046	.030	-.018	.026
月平均世帯所得	.063 [*]	-.014	.015	.042 [*]	.015
N	1,728	1,741	1,724	1,664	1,715
R ²	.042 ^{***}	.040 ^{***}	.017 ^{***}	.020 ^{***}	.014 ^{**}
Adj R ²	.037 ^{***}	.036 ^{***}	.013 ^{***}	.015 ^{***}	.010 ^{**}

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

5. まとめ

本稿では、韓国青少年パネル調査 (KYPS) を基に高校生の職業価値の特性と、職業価値形成の関連要因について検討してきた。最後に分析結果をまとめた上、青少年の進路教育もしく

は職業教育に示唆する点を提示したい。韓国の高校1年生は自分の将来就きたいと思う職業に対して、内的価値>社会的価値>環境的価値>自律・創造的価値>外的価値の順で価値を付与しており、特に、彼らは職業の内的、社会的価値を重視する傾向が強いが、といっても職業の自律・創造的価値、外的価値を無視しない態度を示した。性別には男子生徒と女子生徒の間に職業価値に対する統計的な有意は見つからなかった。そして学校類型別には一般高校の生徒が実業高校の生徒に比べて職業の内的価値、社会的価値、環境的価値、外的価値を重視する傾向が強いことが明らかになった。次に職業価値の影響要因については、性別、学校類型別、学業達成度、性役割態度のような個人的変数の影響が強く、親の職業、学歴、所得などのような環境的な変数の影響は相対的に弱いことがわかった。

以上の分析結果を踏まえて青少年の職業教育またはキャリア教育に示唆する幾つかの点を提示する。第1に、進路探索プログラムと職場体験の強化が挙げられる。昨今韓国社会には厳然として職業階層による社会不平等が存在しており、その中心部には大学の序列が位置している。その故、高校までの学校教育は大学進学の前準備段階に転落しており、学生たちの職業教育またはキャリア教育には十分な対応ができていない。このような問題を解決するためにはより広い視野で自分の将来を考える職場体験の機会を積極的に取り入れるべきである。その具体的な作業として教科課程に進路教育の強化、更に座学ではなく実体験として職場体験の機会を取り入れる事を検討すべきである。

第2に、個人の適性と能力に合う進路教育の強化が挙げられる。分析結果にも表れているように、韓国の高校1年生は自分の将来希望職業に対して内的価値>社会的価値>環境的価値>自律・創造的価値>外的価値の順で価値を付与していることがわかった。このような結果は、韓国の高校生潜在的な職業選択が自分の適性と能力を考慮した進路探索及び準備の結果として‘様々な分野の職業’を希望するというよりは職業階層による社会不平等が親の希望によって青少年に投影された結果として教師、医師など限られた安定的で高所得の職業を希望していることが考えられる。従って、このような青少年たちの受動的な職業選択または特定業種に集中している職業選択を分散、多様化するためには、学生たちの適性と能力を十分考慮した進路教育が行われるべきではないかと考える。

[参考文献]

- 姜永培 (2004a), 韓国における青少年の職業意識構造に関する研究, 東北大学, 博士論文.
 姜永培 (2004b), 中学生の職業選択の決定要因に関する研究, 韓国青少年パネル調査 (KYPS) II, 157-188, 韓国青少年開発院.
 姜永培 (2004c), 青少年の社会参加活動が職業意識決定に与える影響に関する研究, 研究報告書, 04-R23, 韓国青少年開発院.
 姜永培 (2005), 韓国における高校生の職業期待の影響要因に関する研究, *日本研究*, 12, 66-94.
 公報処 (1996), 韓国人の職業意識調査.
 金ヒヨンスク, 姜イルギユ, 陳ミソク, 金ヘドン, 勸ジンヒ, 鄭ユンギョン, 金ホンシク, 李ホンゲ (1998), 韓国人の職業意識調査, 韓国職業能力開発院.
 金ジョンスク (2006), 学生の職業価値に関する研究, *韓国青少年研究*, 17 (1), 79-102.
 南ソングユ (1995), 消費者の意思決定における価値の影響, 成均館大学大学院博士論文.
 白ヨンギユン (1980), 小中高校生の職業価値に関する研究, 高麗大学大学院修士論文.
 梁ハンジュ (1998), 中高校生の職業価値観と職業期待に関する研究, ソウル大学大学院修士論文

- 梁ハンジュ・鄭チョルヨン (1998), 中学生の職業価値観と職業期待に関する研究, *職業教育研究*, 17 (1), 41-54.
- 李カンチュン (2002), 青少年と企業との価値観の両立に関する研究, ソウル地域を中心として, *青少年学研究*, 9 (3), 55-77.
- 李グァンホ・孟ヨンイム・林ソンテク (2000), 青少年の効果的な進路探索のための地域ネットワーク構築方策, 韓国青少年開発院.
- 李ギョンサン (2004), 青少年の職業探索プログラム, 第2回4-H指導教師総合課程, 韓国4-H本部.
- 李オク (1993), 韓国における学生たちの職業概念認識と職業価値に関する研究, *韓国青少年研究*, 15 (冬), 32-44.
- 李ヒョンリム (1997), 大学生の内的・外的な仕事に関する価値観と進路意識成熟に関する研究, *韓国心理学会誌：相談と心理治療*, 9 (1), 289-310.
- 張ウォンソプ (2000), 時間制就業が高校生の職業意識に与える影響に関する分析, *職業教育研究*, 2, 1-27.
- Blunstein, D. L. (1998), The role of goal instability and career self-efficacy in the career exploration process, *Journal of Vocational Behavior*, 35, 194-203.
- Centers, R. (1949), *The psychology of social class*, Princeton, New Jersey: Princeton University.
- Crites, J. O. (1969), *Vocational psychology*, New York: McGraw-Hill.
- Fionrentine, R. (1988), Increasing similarity in the values and life plans of male and female college students? Evidence and Implication, *Sexroles*, 18, 143-158.
- Kluckhohn, C. (1962), Values and Values orientation in the theory, Parsons and E.A Shils (eds.), *Toward a general theory of action*, New York: Harper and Row.
- Krau, E. (1987), The crystallization of work values in adolescence: a sociocultural approach, *Journal of Vocational Behavior*, 30.
- Miller, M. F. (1974), Relationship of vocational maturity to work values, *Journal of Vocational Behavior*, 5, 367-371.
- Schulenberg, J., Vondracek, F. (1993), Career certainty and short-term changes in workvalues during adolescence, *The Career Development Quarterly*, 41, 268-284.
- Super, D. E. (1957), *The psychology of occupation*, New York: John Wiley.

